

## キタキツネのキキ

11

作 なかむら よしひろ

トトのおくさんはキキを見て、キキ以上におどろいたようです。こわい顔をしてトトとキキの顔をこっこのみつめます。言葉には出しませんが、トトには「あなた、どうしてこんな汚いキツネをおうちに連れてきたの」、そしてキキには「いったいなににきたの、ぜったいにうちになんか入れてやらないわよ」と言っているようでした。キキはいたたまれなくなってトトに言いました。

「トト、ぼくはやっばりネズミを食べられないや。」

「まだそんなことを言ってるのか、このきせつにネズミを食わなかったらいつたいなにを食って生きていくつもりなんだ」とトトが声をあげて言いました。

「道路で人を待つよ、キキはさっきあれほど長い間待って一口も食べも

のにありつけなかったことを決して忘れていたわけではありません。でもその場をはなれるにはそう言うほかなかったのです。

「そんなこと言ったって、こんなに雪が降ったらもう観光客なんて来ないぞ。」

「それでもいいよ、ぼくもうちよつと待つてみる。」

「そうか、じゃあ勝手にしろ。」気を悪くしたトトは巢の中へはいってしまいました。そのうしろ姿を見てキキはとてもしほそくなりました。

よほど追いかけてトトの暖かい匂ぐらに入れてもらおうかとも思いました。でもキキをじっとにらんでいる

トトのおくさんを前にしてとてもしほそなかつたのです。それと、ふさふさとした冬毛につつまれたトト

のたくましい体に比べてあまりにもなまけない体でした。夏毛のまま

しかもところどころ皮ふ病で毛が抜け落ちてまるでボロボロきんのように

です。そんな体をトトのおくさんにまじまじと見られるのがとてもはずかしかつたのです。

キキはゆっくりとクマザサの茂みを下り始めました。キキの体がクマザサにふれると葉に積もった雪が背中に落ちてきます。そのたびに背中

をすくめながらキキは歩きました。ようやく巢についたキキはおなかも減っていたのですが、もう道路まで降りていく元気もなかつたのでそのままよこたわり丸くなりました。おなかが減っていると寒さがいちだんと身にしみみます。

「明日こそはおいしい食べものももらえますように。」そう思いながら

よくやく眠りにつきました。

よくやく眠ると同時にキキは道路に降りました。おなかはどうしようもなくすいていたのですが、

一晩寝たら少しは元気が出たのです。道路わきにじつと座って昼まで待ち

ました。止まってくれる車は1台もありませんでした。キキは場所を

変えることにして展望台の駐車場に行つてみました。そのゴミ箱に人

間の食べ残しのお弁当が捨ててあるかも知れないと思つたからです。で

もゴミ箱は空でした。底の方に半分こおりついた雪がつもっているだけ

です。

北海道の冬はあつという間に日がくれます。キキはあきらめてトト

ボと巢に帰りました。帰る途中クマザサの葉を口に入れてみました。この季節で青いのはクマザサの葉だけです。でもそれは青臭く紙のように

ばさばさでとても食べられるもので

はありませんでした。鹿がかる木の皮も食べてみました。でもこれはクマザサの葉以上に固くまるで石のようでした。

次の日も、そしてその次の日も何も食べることができませんでした。

もう最後に食べたのはいつだったか思い出せないうらい長い日が経ちました。その日もキキは道路に座つて

子どもを一杯乗せた車が来るのを待ちました。

頭に思い浮かぶのは食べもの事ばかりです。

「一番最初にもらったドーナツはおいしかったなあ。お母さんのミルク

もおいしかったけど、あのドーナツにはかなわないな。それとそれに

もらったミルクチョコトレートの甘さつたら、ほっぺが落ちるかと思つ

た。まただれかドーナツやチョコトレートをくれないかなあ。」

ようやく1台の車がやって来ました。キキは立ち上がつて車が止ま

てくれるのを待ちました。でもそれは大きなトラックで、キキには見向きもせず雪けむりを立てて行ってしま

いました。

(8月号へつづく)